

しゅう せん か にっ き 周旋家日記 ⑦ 乾明紀

「住職の依頼をどうしよう？」

今回は、前号で書けなかった前々号の続きを書こうと思う。前々号では、「祖母の死と浄土真宗との佛縁」をテーマに、祖母の死によって菩提寺の住職と出会い、その住職の説明によって浄土真宗に関心を抱いたところ、住職から思いもよらない依頼を受けた、というところで筆を置いた。

98歳の大往生した祖母は、信心深い人だった。その祖母に導かれたのかもしれないが、本当に思いもよらない依頼だった。その依頼とは、親鸞聖人750回御遠忌法要のディレクションであった。浄土真宗では、東本願寺だけでなく、末寺においても、50年に一度、宗祖の遺徳を偲び、大きな法要が営まれる。住職にとっては、恐らく一生に一度の非常に大きな行事だ。その一大行事を企画・運営するために、住職は私に、ディレクターとして協力してくれということである。

私は何度もごまかし、はぐらかした。いくら檀家とはいえ、私のような若輩者に勤まるわけがないと感じたからだ。さらに、住職のこともこれまで知らなかったし、もちろんお寺の歴史も教団のことも知らない。また、総代会的な組織があるのかどうかも知らなかった。しかし、住職は、祖母の仏事がある7日ごとに、私に協力を要請する

のである。住職と最初の挨拶を交わした際に、「周旋家」として様々なプロジェクトのプロデュースやディレクションをしていることを伝えてしまっていたので、住職はそこに期待したようだ。

やがて、四十九日が過ぎ、少し落ち着いたので、私は、受けるか受けないかを正式に回答するために、本格的に住職の話聞くことにした。2011年の11月だった。これを期に菩提寺のことを深く知ることも悪くない。よく知らないお寺にお参りしたり、されたりしてもありがたくもないし、先祖代々だからといって無批判に信じることに違和感を覚える世代でもある。そこで、まずはヒアリングをさせていただくことにした。

私は、本堂を前に住職にいろいろと尋ねた。特に聞いておきたかったことは、お寺の歴史、どのようなことをされたいのか、どのような特徴があるお寺なのかということであった。

まず、歴史であるが、住職の話によると、私の菩提寺は、宇治川の合戦で梶原景季と先陣争いをしたことで有名な佐々木四郎高綱の弟が、親鸞聖人と出会い、それまで荒廃していた天台宗の塔頭を真宗道場として、嘉禎2(1236)年に再興したのが始まりで

あるという。現在の住職は、開基から数えて23代目であり、俗名も佐々木氏を名乗られている。また、現在の所在には、5代前の住職のとき、蛤御門の変(どんどん焼け)か鳥羽伏見の戦いのどちらかに巻き込まれ、焼失したことが原因で移転したそう。このような危機があった菩提寺であったが、移転先も京都市内中心部に近く、また、21世住職の人徳もあり、多くの門信徒が帰依したという。

21世住職の人柄については、私も良く聞いた。月参りなどの際に、子どもがお参りしていると、必ずとっていいほど、袈裟の袖からお菓子を出して渡されたそうで、檀家の間では、人柄を表す有名なエピソードとなっている。22世住職は、念仏にも通じる合唱活動に熱心に取り組み、大学生の指導や国体開会式での指揮者なども担当された。そして、私に思い切った依頼をする(笑)当代の23世住職は、様々な経験をされているユニークな方であった。私がとくにそう感じたことのひとつは、住職が仏教に関する探求のために、太平洋を越えて大学院に進学され、そこで家族で暮らされていたことだった。その結果、子どもたちも全員英語を話し(4人中3人はネイティブ!)、一般的な日本人の家族と生活様式が少し異なるのである。私は、これは可能性だと感じた。伝統的なことと対立することもあるだろうが、お寺も変化しないといけない時代に、これはお寺の強みとなると直感した。

そんな可能性のあるファミリーを持つ住職の想いは、この時点では、まだ明確なビジョンにはなっていなかったが、私なりに住職の言葉を紡いでいくと、大法要を機に、

檀家との紐帯を深め、自坊の歩んでいく方向性を定めていきたいのであろうと理解した。様々な分野で活躍されている檀家各位のことも伺った。

また、お話を聞く中で、お寺というものが、対人援助実践のプラットフォームや人々のネットワークのハブとして、様々な可能性があることが見えてきた。仏教では、人間には、「生老病死」という逃れられない4つの苦しみがあるというが、それぞれの苦しみに対して様々なアプローチで支援することが可能であろう。既に、菩提寺でも、社会的対応などが苦手な就労が困難になっている方を支援するNPOに協力されている。これは、「生」あるいは「病」への支援だ。また、お寺の空間は、人が集まるように設計されているため、様々なイベントを開催することも可能なのである。

私は、大それたことを考えた訳ではないが、気付けばお寺の可能性を頭に描くようになっていた。そして、仏教(浄土真宗)を学びながら、社会的な貢献ができるのであれば、40歳を過ぎた私の節目としても良い機会であると考えた。私は、丁度そのころ、これまでを振り返り、そして、これからの人生をどのように歩むべきかで大いに悩み、また期するところもあった。亡くなった祖母は、そのような私を浄土から見守り、私のために必要な環境を出現させたのではと思うようになった。私は、住職を通じて、祖母そして阿弥陀仏の本願に救われようとしていたといえる。私は、住職の依頼を承諾し、法要のお手伝いをすることにした。<つづく>